

## アジア遠隔医療プロジェクト : Balancing on a Rolling Ball

清水, 周次  
九州大学病院医療情報部

<https://hdl.handle.net/2324/8527>

---

出版情報 : 情報処理. 46 (12), pp.1411-1411, 2005-12-15. 情報処理学会

バージョン :

権利関係 : ここに掲載した著作物の利用に関する注意 本著作物の著作権は(社)情報処理学会に帰属します。本著作物は著作権者である情報処理学会の許可のもとに掲載するものです。ご利用に当たっては「著作権法」ならびに「情報処理学会倫理綱領」に従うことをお願いいたします。

## アジア遠隔医療プロジェクト

— Balancing on a Rolling Ball —

中島 直樹

九州大学病院医療情報部  
nnaoki@info.med.kyushu-u.ac.jp

## 非「独走的」分野

遠隔医療を行う医療情報学は、「医療」と「情報技術」という2分野にまたがる学際的分野である。この分野では総体として医療がユーザで情報技術が基盤提供者であることに議論の余地はないが、研究期において医療が主導権を握りすぎると、情報技術の研究者はそっぽを向き、時代遅れの情報技術を用いてしまうこともある。発展著しい情報技術におけるこの遅れは、研究後の実用化において致命的なものになりかねない。逆に情報技術側が主導権を握りすぎれば医療側がへそを曲げ、実用化には程遠い「なんちゃって遠隔医療」になってしまう。類似する組織体制を持ちながら文化が大きく異なる2分野の共同作業であり、いわば魚屋と八百屋が1つの店舗を共同経営するようなものである。「ためえに魚の何がわかるってんだい」となるわけである。このあたりが、すべての分野の研究者に刷り込まれている「主導権奪取」の本能に背く部分で、成果を求められる学際領域の難しい部分である。そこに配慮しながら始めた共同研究でも、進んでいくうちに相手側分野に（表層的に）詳しくなるにつれ、自分で何でもできるような気になって独走しがちだ。徹底した役割分担こそが学際的分野の生命線である。

## 国際的標準化

科学である「医学」に国境はないが「医療」には、ある。経済力、倫理・宗教観、気候、風俗、政策などが医学に複雑に影響し、その国独自の医療を形成する。外を見ていないといつの間にか「これが医療の唯一の姿だ」と思ってしまう。この医療の国境を打破するために、すなわちアジアレベルでの医療の標準化を進めるために、九州大学（情報基盤センターおよび附属病院）がブロードバンドによる国際遠隔医療

プロジェクトを始めて3年になる。繋がった国は7カ国（日、韓、米、豪、中、台、タイ）で正式なイベント履歴数は50に迫っている。この3年間で打合せやテストのためにこれらの国々を何度も訪れた。使うソフトやハードの手配などについて、互いに片言の英語で苦労しながら打ち合わせ。「情報通信技術も早く国際標準化されないかな」、などと思いながら会議を終えたら宴会だ。たとえば韓国では宮廷料理、韓国焼肉をを楽しむのは良いのだが、なにかの幼虫の炒め物、エイのアンモニア漬けまで勧められる。爆弾酒（ボム）とはウイスキーのピール割り、日本では近年騒ぎ視される「一気飲み」を強いられる。韓国人はなぜか皆酒が強い。長い夜と、苦しい二日酔いが待っている。しかし支払いは皆、ホストである韓国側の「おごり」である。これらは中国でも台湾でも同様であり、東アジア人は来客を大切に、もてなす心情が強いとみる。どこからお金が出るのかは不思議である。さて一方、我々が訪れるように、日本側へも「打合せ」と称して多くの朋友がアジアから訪れてくる。当然もてなさなきゃならない。どこで聞いてきたのか「中洲へ行きたい」などと言い出す。しかも酒は恐ろしく強い。研究費からは飲食代は出せないし、うーん、困った。まず最初に国際標準化すべきなのは、日本が世界に誇る「ワリカン文化」なのかもしれない。

## 医療の国際格差

医療の格差、医療の標準化、などという、「日本は医療最先端国だから、アジアの遅れた医療を指導しないといけない」という声が聞こえそうだが、これは間違いである。日本の医師はよく欧米に留学するが、多くが試験管を振る基礎医学研究を行う。一方でアジア諸国の医師は留学先で医師資格を取り、医療そのものを学んで持ち帰る。したがって、医師の間でもあまり知られていないが、実はアジア諸国の医療技術は部分的には日本よりも進んでいる。また、日本のように医療が平等な国は少なく、金持ちにはより高度な医療を、という思想から日本にはないような素晴らしい技術とサービスを持った重点主義型病院がアジアにはいくつも存在している。その思想の是非はさておき、日本から一方的に技術供与を行う遠隔医療よりも、双方向の、つまりアジア諸国からも医療技術を学ぶ遠隔医療という形が日本側のモチベーション、およびアジア諸国の自尊心を保てるため、我々としても都合が良い。ITも医療もいつの間にか日本がアジア諸国のトップランナーとは言えなくなっていることは少し悲しいが、凄まじいアジアの活力を導入することは日本にとって意義が深いし、逆に医療鎖国を続けると没落は目に見えている。

このように考えてみると、「非独走的、ワリカンの、双方向的」感覚、すなわち「バランス感覚」がアジア遠隔医療のキーワード、ということになる。アジア遠隔医療プロジェクトは、地球で玉乗り（balancing on a rolling ball）をしているのだ。

（平成17年10月17日受付）